

## 悲劇の美女 ママヤの伝説

むかし保良（ぼら）の村にとても美しい娘がいました。平家の落人で名前をママヤといいました。ママヤの美しさは、宮古のほかの村にまで知れ渡るほどでした。また、はたおりの名人で、すばらしい布をたくさん織ることができました。

その噂を聞いた島の実力者や宮古の役人が、毎日のようにママヤの家におしよせてきて結婚を申し込みました。ママヤは「私はこのまま一人でいたいのです」と断りましたが、男たちが家に来るのをやめなかったため、ママヤは東平安名崎の洞窟に身を隠してしまいます。

ある日、保良地区で一番の有力者だった按司（あじ）の崎山の坊がママヤの隠れている洞窟を見つけ、結婚を申し込みます。断るママヤに崎山の坊は、勝負をして自分が勝ったら結婚するという約束を取り付けます。勝負の内容は、崎山の坊が保良から、海岸から拾ったさんご石を並べていき、ママヤは芭蕉の糸をつないで、どちらが先に狩俣に着くことができるか、というもの。勝負は、崎山の坊が家来や農夫を使って次々と石をつないでいく中、一人で糸をつなぐママヤに勝ち目はありませんでした。

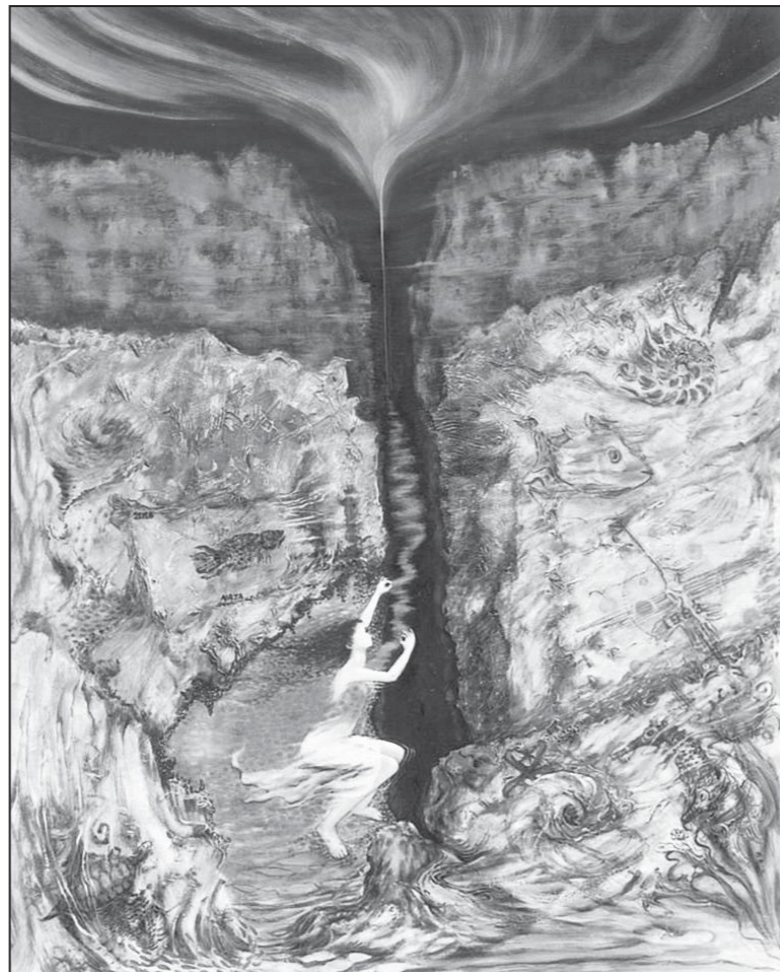
こうして崎山の坊と結婚したママヤでしたが、なんと崎山の坊にはすでに奥さんがいました。先の奥さんはママヤにつらくあたり、ママヤは崎山の坊に先の妻と別れるよう頼みましたが、『子どものいる最初の妻が大事だ』と言われます。

失望したママヤは家を飛び出し、東平安名崎に行きます。『神様、私がこんなに辛い辛い思いをしたのは私が美しかったからです。この保良に美しい娘が生まれないようにしてください。』と祈りながら崖から身を投げて死んでしまいました。その後、長い間保良の村には美しい娘が生まれなくなりますが、ママヤの祈りを解く術がありました。それは女兒を妊娠したら、東平安名崎の芝生の窪みに溜まった水に満月が映った時、その満月を手ですくって飲むことです。そのおかげで、保良では現在、目鼻立ちのはっきりした美人が多く生まれるそうです。

（『沖縄の民話：ママヤの伝説』より

※言い伝えには諸説あります）

## 第54回たぶろう展 (2019) 内閣総理大臣賞受賞作品 『オーロラとママヤ』（西里恵子 作）



保良漁港に実際にある大岩が海に沈み、その中で天空のオーロラの光から糸を紡いでいるママヤを神秘的に描いた作品。西里さんが生涯追い求めているテーマを描いた作品が審査員の目に留まった。ママヤは、西里さんにとって、『悲恋の美女』ではなく『織物に魅せられた一人のアーティスト』。

開催される全国公募型のコンクールで、今年は約180点の作品の中から見事に最高賞に選ばれました。受賞した『オーロラとママヤ』は、F100号（約165cm×130cm）の大作で、ママヤの墓がある東平安名崎に何度も足を運び、構想を膨らませて完成させたとのこと。

### 画家『西里恵子』

宮古島から芸術を発信する西里恵子さんのインスピレーションの源はどこにあるのか。今月号では、画家『西里恵子』の素顔に迫ります。



ふるさと  
宮古島の魅力を  
アート  
絵画にのせて。

### 特集

本当に大切なものは意外と気付きにくい自分の足元にある。西里さんの絵にとって大切なものは、生まれ育った宮古島にありました。

## 『宮古島』に夢を描く

### 筆

に想いを乗せて形に顕していく絵画の世界。絵は言葉

を超えて、子どもから大人までの共通言語として、作者の内面を伝えるツールです。絵画展などで展示品を見ていると、言葉にはできない感情が湧き上がってくるのを、誰でも一度は経験しているのではないのでしょうか。想いが込められた絵は、感情を動かし、見る人を魅了します。

### 全国公募で最高賞

城辺在住の西里恵子（にしざとけいこ）さんは、今年6月に東京都の国立新美術館で開催された『第54回たぶろう展（たぶろう美術協会主催）』で、最高賞に当たる内閣総理大臣賞を受賞しました。たぶろう展は、毎年6月に